

2020年8月9日（日）「財の管理者 ～分かち合う友の必要性～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:7-8

7 私は再び太陽の下、空である様を目にした。

8 一人の男がいた。孤独で、息子も兄弟もない。彼の労苦に果てはなく、彼の目は富に満足しない。「誰のために私は労苦し、私自身の幸せを失わなければならないのか。」これもまた空であり、つらい務めである。

《新改訳 2017》伝道者の書 4:7-8

7 私は再び、日の下で空しいことを見た。

8 ひとりぼっちで、仲間もなく、子も兄弟もない人がいる。それでも彼の一切の労苦には終わりがなく、その目は富を求めて飽くことがない。そして「私はだれのために労苦し、楽しみもなく自分を犠牲にしているのか」とも言わない。これもまた空しく、辛い営みだ。

### 【序論】

今日は、私たちの生活に密接な「お金」に関する話になります。改めて「お金」という言葉を口に出してみると、そこにはいくつかの暗黙のイメージが置かれているように思います。あくまでも私の頭から絞り出したものですが、10個ほど挙げてみました（順不同）。

- ①生きていく上で必要不可欠なもの
- ②特別な理由がない限り、手に入ると嬉しいもの
- ③それを「好き」だと露骨に言うと軽蔑されやすいもの
- ④人間社会で（すべてではないが）物事の価値を計る基準とされているもの
- ⑤不正と結びつきやすいもの
- ⑥時として人の考え方や人格を変えてしまうもの
- ⑦人に管理を要求するもの
- ⑧人間しか扱わないもの
- ⑨靈的な事柄を見えなくさせる危険性のあるもの
- ⑩失うときに恐怖や恨みをもたらすもの

このように、お金というのは人間にとって「諸刃の剣」であり、極めて必要なものでありながら、それと引き換えに何かを失わせる力を持つものです。お金をどう管理するかということは、人の人生における重要な一面です。これもまた（時間の管理と同様）人間にしか与えられていない管理領域と言えるでしょう。そして、人はそれぞれ「与えられた分」をどう用いたかが問われるのです。

## 【本論】

前回扱った 4:4-6 では、労働における「働きすぎの問題」「働かざる問題」「適度な労働」という内容を学びました。今日の箇所は更に進んで、労働一筋に生き続けた結果、お金を蓄えることにしか興味がなくなってしまった人の問題について考えます。その裏側にはやはり「交わり」という事柄が隠されています。興味深いことに、「お金への関心」と「人格的交わり」が裏と表の関係になっているのです。取り組むべき課題は、その両立はあるのかということでしょう。

### 本論 1. 孤独な守銭奴を第三人称で語る

**私は再び太陽の下、空である様を目にした。(4:7)**

再び「太陽の下」という表現が登場します。この言葉が出てきたら、神を除外した世界観を思い浮かべていただきたい。無神論的世界観であり、無目的に同じように回り続ける無機質な世界がイメージされます。その空の下で行なわれるあらゆる営みを、コヘレトは「空しい」「無意味だ」と言うのです。

**一人の男がいた。孤独で、息子も兄弟もない。(4:8a)**

聖書協会共同訳では「一人の男がいた」とまず区切られています。原文では「いる」を意味する語「**ישׁ** / イェーシュ」が冒頭に置かれていますので、この訳は雰囲気が出ているでしょう。口語訳の「ここに人がある」も良い訳でした。どんな人なのだろう？と読者に期待を持たせます。ところが、「孤独で、息子も兄弟もない」という説明が続き、あれれ？と思う。「孤独で」という部分を新改訳 2017 は「仲間もなく」と訳していますが、この言葉は本来「もう一つの」「第二の」を意味する「**שני** / シェーニー」という語で、この人にとっては自分こそが第一であり、次はいないということをよく表しているでしょう。彼は長年一人で生きてきたのであり、仕事でもそれなりに業績を上げ、時に同僚を蹴落とし、のし上がっていくうちに、気づいたらひとりぼっちになっていたという人だと思われます。結婚にも興味はなく、俺が稼いだ金をなぜ他人にやりにやらんのだと意固地になっているうちに、人のためにお金を使うことの意味をすっかり見失ってしまいました。孤独を紛らわすために更に仕事に熱が入る。収入は上がる。いつしか蓄財が目的となり、多くのお金を持っているところに自分のステータスを見出し、人を見下ろしているような心境になる。

未婚であれば「息子も兄弟もない」のは当然のことでしょう。しかし、ここでは相続者がいないことが強調されているのです。せっかくお金を貯めても、その人が死んだら

それを受け継いでくれる人がいない。まさに、どこかの馬の骨のものになってしまうのです。しかし、そんなことはあまり考えたくもない。現実には目を瞑<sup>つむ</sup>ってがむしゃらに生きているうちに、いつしか年齢を重ねていく。

彼の労苦に果てはなく、彼の目は富に満足しない。(4:8b)

彼の生きがいは「富」であって、それ自体が目的であり、お金を集めることにおいては終わりが見えない。更なる高みを目指し、誰かよりも上になろうとすればするほど、もっと稼がなくては…という焦燥感に囚われる。この人はどうもそのような迷路にはまり込んでいるようです。

まず心に留めたいことは、コヘレトが「一人の男がいた」と第三人称でこの人について語っているという点です。「あなたの周りにそういう人はいませんか？」という問いかけが暗になされているようです。

## 本論2. クリスマスキャロル

私がこの箇所を学びながら思い浮かべたのは、イギリスの文豪チャールズ・ディケンズの小説『クリスマスキャロル』でした。この小説は映画にもなっており、子どもの頃に何度も家族で観たものです。物語のあらすじを引用させていただきます。

作品の主人公は、エベネーザ・スクルージという初老の商人で、冷酷無慈悲、エゴイスト、守銭奴、人間の心の暖かみや愛情などとはまったく無縁の日々を送っている人物である。ロンドンの下町近くにスクルージ&マーレイ商会という事務所を構え、薄給で書記のボブ・クラチットを雇用し、血も涙もない、強欲で、金儲け一筋の商売を続け、隣人からも、取引相手の商人たちからも蛇蝎<sup>だかつ</sup>のごとく嫌われている。7年前の共同経営者であるジェイコブ・マーレイの葬儀においても、彼への布施を渋り、またまぶたの上に置かれた冥錢を持ち去るほどであった。

明日はクリスマスという夜、事務所を閉めたあと自宅に戻ったスクルージは、7年前に亡くなったマーレイ老人の亡霊の訪問を受ける。マーレイの亡霊は、金銭欲や物欲に取り付かれた人間がいかにか悲惨な運命となるか、生前の罪に比例して増えた鎖にまみれた自分自身を例としてスクルージに諭し、スクルージが自分以上に悲惨な結末を回避し、新しい人生へと生き方を変えるため、3人の精霊がこれから彼の前に出現すると伝える。

(Wikipedia より)

この物語に登場する三人の幽霊は、過去、現在、未来をスクルージに見せてくれます。

第一の者は、スクルージが貧しかった少年時代の夢、青年時代の恋を思い出させてくれます。そして、いつしか金銭欲と物欲の塊となって、大切な人を失った過去に向き合わせます。

第二の者は、スクルージの現在を見せ、貧しい中であっても温かな家庭を築いている部下のクラチットの家族や、伯父を呼べなかったことを残念ながらも知人たちと楽しく夕食会を催しているフレッドの家を覗かせます。クラチットには脚が悪く病気がちな末っ子のティムという息子がいて、彼がもう長くは生きられないことが示され、スクルージはうろたえました。

第三の者は、町で評判の悪かった「一人の男」が死んだという噂にスクルージを会わせます。死んだ人が誰であるかは明らかにされず、人々はその男の死を喜び、死体にまで散々な仕打ちをしている様子を目の当たりにします。第三の幽霊はスクルージを墓地に連れて行き、その死んだ男がスクルージ自身であることを示し、彼は衝撃を受けません。

ディケンズのイメージの背後には、もしかしたらコヘレト 4:7-8 の聖句があるのかもしれない。お金に魂を売った人の行き着いた先が「交わりの喪失」であることを描いた傑作です。

### 本論 3. 第一人称で語ることで我が事として捉えさせる

8 節の後半部分で、「一人の男」が言っている言葉に注目しましょう。

「誰のために私は労苦し、私自身の幸せを失わなければならないのか。」(4:8c)

新改訳 2017 では「『私はだれのために労苦し、楽しみもなく自分を犠牲にしているのか』とも言わない」と訳されていますが、原文には「とも言わない」という補足はありません。この突如として入り込んできた問いは、彼が蓄財のために努力してきたすべてのことが「もしかしたら無意味なのではないか」という疑念の中に放り込まれたことを表しています。「俺がやってきたことは一体何だったのか!」。富が彼のアイデンティティそのものようになっていた。しかし、その無機質なものは、彼が元々持っていた「人の間」に生きるという人間らしい営みを奪ってしまったのです。

注目すべきことは、ここに来てコヘレトが第三人称ではなく第一人称で「一人の男」の言葉を差し込んでいるということです。これはコヘレト自身が経験したことなのか、あるいは自分の身をこの物語の主人公の淋しい状態に置いてみているのか。コヘレトは読者に何を訴えているのでしょうか。彼はそういう生き方をしている人を揶揄することを

目的として語っているのではありません。お金というものが持っている危険な力に気づかせること、そして、お金の虜になってしまった人の目を醒させることなのではないでしょうか。

「クリスマスキャロル」のストーリーには続きがあります。自分の未来を示されたスクルージは、そんな死にはしたくないと苦しみもがきながら目を覚まします。何と、今見てきたことは夢であり、まだ自分は生きていて、未来を変えるチャンスがあることを知るのでした。クリスマスの朝、スクルージはマーレイと三人の幽霊に人生を改める誓いをし、直ちに実行に移します。クラチット家にご馳走を贈り、前夜寄付を求めてきた紳士たちを探して必要なお金を与え、フレッドの夕食会に参加します。その翌日には、低賃金しか与えていなかったクラチットの雇用を見直し、彼の家族への援助を申し出、その結果ティムの病気も治り、「ロンドンで一番クリスマスの楽しみ方を知っている人」と呼ばれるようになります。

この物語は、お金は何のために人に与えられているか、その真髄を教えてくれているでしょう。それは、人のために使うところに真の喜びをもたらすものなのです。これは、人間が人格的存在として造られていることの証とも言えます。科学によっても解明することはできない、アガペーなる神の愛を反映する領域であります。財を蓄えることは重要です。しかし、それを誰かのために用いることは、もっと重要なことなのです。

## 【結論】

コヘレトは、無目的に、あるいは自分のためだけに蓄財する人の淋しい結末を明らかにしました。しかし、ここにもやはり裏側からのメッセージがあるでしょう。財は神から賜物として与えられるものであり、それを如何に用いたかが重要なのです。多く与えられたら与えられただけ、それをどう管理し、神と人のために用いたかが問われることになるでしょう。財をもって人を愛する道もあれば、自分のためにただ積み上げて最後は取り去られてしまう道もある。与えられたものを更に与え、誰かに喜ばれ、心と心の交流が生まれるところにこそ、財の管理者とされた人間の真の目的があると言えないでしょうか。その意味で、お金を持つことと人格的交わりは両立しうるものと私は思います。お金もまた主にあって正しく用いられるとき、それは聖いものなのです。

## 【祈り】

人間を「経済的存在」となし、この社会の管理を任せておられる、天の父なる神様。人はお金において罪を犯しやすいものです。本来聖いものとして与えられたものを、罪の道具としてしまう危険性に常に晒されています。これを賢明に管理し、隣人のために喜んで用いていく心の自由をお与えください。そして、ささげる喜び、与える喜びを広く伝達し、偏りある社会に良循環をもたらす者となることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人間社会に「経済」という概念を与え、知恵をもって管理することを求め給う、父なる神の愛、

神にささげ、人に与えるところに、無上の喜びを見出させ給う、主イエス・キリストの恵み、

神のアガペーによって成り立つ世界を、ご自身の民を通して実現に至らしめ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。